

会報 札幌くらぶ

2024年 5月 第105号

編集・発行／札幌くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札幌事務局気付
ホームページ <http://sakyoclub.net/sakyoclub/>

第39回札幌くらぶサロン 春の訪れを華麗に奏でた素敵なオーボエの世界



第1部 サロンコンサート

令和6年4月7日(日)、第39回札幌くらぶサロンが「豊平館」2階広間にて開催され、春の訪れをオーボエ・ピアノで流麗に歌い上げていただきました。桜前線が北上している時節で、当夜のオーボエの音色は「美しく咲き誇る桜の花のごとく」と感動いたしました。桜は低音域で次第に花開き、高音域で満開となつて最後は早いパッセージで千々に乱れ散つ

てゆく。オーボエの低音ピアノのロングトーンは哀愁を帯びて散りゆく桜のはかなさのよう……。美しい季節の情感を心から楽しめました。

オーボエ演奏は浅原由香さん。ピアノは片山悠さん。浅原さんのご経歴とご活躍は以前からよく知られておりますし、ピアノの片山さんは札幌市出身でピアノ、作曲を専攻され、奏楽

堂日本歌曲コンクール作曲部門第一位入賞の経歴をもつ新進気鋭のピアニスト。各作品の奥深い構成をよく研究し浅原さんの演奏を見事に引き立て、作曲家の意図した世界を味わい深く表現されていきました。この絶妙なコンビネーションを堪能できただけでも私は、当夜「豊平館」に足を運んだ甲斐があつたと思つたほどでした。また曲の合間の浅原さんご自身による解説が、この演奏会により親しみを感じさせてくれました。

第1曲はG・F・ヘンデル作曲「ソナタ変ロ長調HWV357」。ヘンデル初期の作品でメロディーが格調高く朗々と奏でられました。

第2曲はE・ボザ作曲「田園幻想曲」。ボザは20世紀初頭に生まれ、1991年没の作曲家で、その作品は楽器の能力限界までの演奏技術が要求されているとのこと、素晴らしい模範演奏を聴くことが出来ました。

第3曲はC・シューマン作曲「3つのロマンス」。決して気負わず淡々と演奏する姿勢に感動しました。クララ・シューマンの

女性らしい雰囲気は浅原さんのソフトな音色で素敵に味わうことができ、片山さんのピアノがそれによく呼応していました。R・シューマン、J・ブラームスと続くドイツ・ロマン派の「憩いの橋渡し」まで感じさせてい

ただきました。解説の中で浅原さんが作曲家としての片山さんに問いかける場面があり、とてもほほえましく好感がもてました。

第4曲はB・ブリテン作曲「デンプラルヴァリエーション」。これは「世俗的変奏曲」と訳されていて、主題と8つの変奏、それぞれかなり凝つた技巧で書かれています。ブリテン20歳代前



第3部交流パーティーでの二ノ宮 第2部で札幌定期プレトークを担当した八木幸三顧問と乾杯！

第3部交流パーティー恒例 札幌楽員さんからお知らせ 子エロの廣狩理栄さん R(アール)弦楽四重奏団 演奏会(6月17日)の「案内に



半に作曲された難曲ですが、演奏者二人はそれを感じさせず容易く演奏していただきました。

第5曲はA・ボンキエツリ作曲「カプリッチョ」。プログラムの最後にふさわしくノリノリの演奏で大いに楽しめました。アンコールはR・シューマン作曲「夕べの歌」。この曲を演奏することによって演奏者お二人のシューマン夫妻への敬意が深く感じられたわけです。

Bravo(演奏中、客席からも声)浅原由香さん、片山悠さん。長時間の緊張度の高い演奏、お疲れさまでした。満員の観客席は十分音楽を堪能した喜びと満足感に満ち溢れておりました。

会員／松本良一

6月〜8月 名曲 定期 EYEシリーズ定期演奏会

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札幌くらぶ顧問）

名曲コンサート

6月8日（土） 14:00

指揮 広上淳一
ピアノ 小山実稚恵

J・S・バッハ

管弦楽組曲第3番

J・S・バッハの管弦楽組曲は4作品が現存している。これら

はケーテン宮廷楽長時代に作曲されたと考えられていたが、その後ライプツィヒで「コレギウム・ムジクム」と呼ばれる楽団で演奏され、手直しが加えられている。そのため成立年代については不明な点が多い。バッハの管弦楽用組曲の基本は、序曲と舞曲である。この第3番も第1曲は威風堂々たる序曲ではじまり、中間部は協奏曲風構成で、独奏ヴァイオリンが活躍する。心に染み入るような美しい第2曲のアリアは後に「G線上のアリア」として編曲された。力強く、素朴で親しみ深い第3曲のガヴァットもあり、特に有名な組曲となった。

ブラームス

ピアノ協奏曲第1番

若きブラームスは、師であるシューマンがライン河に入水未遂をした半年後に「2台ピアノの為のソナタ」を作曲した。この曲を彼は、シューマンの妻クララと試奏を繰り返しながら初の交響曲に書き直そうと考える。しかし、交響曲の構想はピアノと管弦楽の為のこの曲へと変わっていった。ブラームスの真の交響曲は、それから20年の歳月が必要だった。

のりきつた「傑作の森」と呼ばれる10数年の間につくられていた。交響曲第1番から、練達した作曲技法がみられ、第1楽章冒頭は、それまでの他の作曲家にはなかった凝った和音進行がほどこされ、この「迷い道くねくね」からたどり着いた第1主題は実に明快で開放的だ。その澀刺とした楽想は、当時彼が思いを寄せていた「不滅の恋人」ヨゼフィーネへの心の高鳴りが聞こえてくるかのようだ。

楽が展開されるように作られている。初演当初は不評を買ったが、14年後クララの独奏によるゲヴァントハウスでの演奏は好評を呼んだ。ピアノ界の重鎮、小山実稚恵が札幌との丁寧な止のピアノリズムを聴かせてくれることだろう。



広上淳一

©Masaaki Tomitori



小山実稚恵

© Hideki Otsuka

ベートーヴェン

交響曲第1番

ベートーヴェンは、交響曲第1番を作曲する前にピアノソナタや室内楽さらに協奏曲などで多くの革新的な工夫を試みた。その集大成としての交響曲は、第1番から第8番までが彼の30歳代から40歳代前半の脂の

それまでの協奏曲のイメージは、独奏楽器が超絶技巧を駆使して、管弦楽と対峙しながら華やかに演奏するものとされていたが、この曲はピアノ独奏と管弦楽が融合し、一体となって音

ドヴォルジャーク

交響曲第9番

「新世界より」

昨年、人気を呼んだNHKアニメーション「青のオーケストラ」の最終回で、主人公が加わる高校オーケストラが終始演奏

し続けていたのが、「存じ」新世界より」。この曲はドヴォルジャークが音楽院長に就任するたためアメリカに渡り作曲したものだ。素朴なインディアンの民謡や黒人霊歌に強い影響を受け作曲されたが、決してアメリカそのものを描写したものではない。彼は、新天地のアメリカに渡ったことで、あらためてボヘミアの精神と故国への郷愁が盛り込まれた新しい音楽を書こうとしたのだ。誰もが口ずさめる「新世界より」の第2楽章は、ドヴォルジャークの代名詞的旋律で後に彼の弟子が「家路」という題名

第662回定期演奏会
6月29日（土） 17:00
30日（日） 13:00
指揮 シヤルル・デュトワ
ヴァイオリン 金川真弓



シヤルル・デュトワ

©Priska Ketterer

で歌曲にしている。
フランス作品には定評のある
巨匠シャルル・デュトワが、ボヘ
ミアの神髄をどう伝えてくれる
のか、大注目の定期だ。

■チャイコフスキー

ヴァイオリン協奏曲

パリでラロの「スペイン交響
曲」を聴いたチャイコフスキー
は、サラサーテが演奏するその
曲に大感激し、自分もロシアの
民族的要素を内包するヴァイオ
リン協奏曲を作曲しようと決意
する。当時、不幸な結婚生活に破
れた後、メック夫人の援助を受
けスイスで神経衰弱の療養をし
ていた作曲者は、友人のヴァイ
オリニスト、コテックの助言を
受けながらわずか1ヶ月たらず

でこの曲を完成させた。順調な
作曲に反し、初演は難航。当初、
この曲を献呈しようとした大御
所アウアーに演奏不可能と言わ
れ、やっとこぎ着けたウィーン
での初演でも音楽評論家ハンス
リックが、「粗野な悪態を聞き、
安酒の臭いを嗅ぐようだ」と酷
評した。しかし、初演したヴァイ
オリニスト、プロズキが普及
につとめ、ロシア民衆が自分た
ちの音楽として受け入れる中、
評価も高まっていった。まさに
ロシアの力強い民族的味わいが
堪能できる作品だ。

昨年の札幌定期でプロコフィ
エフ「ヴァイオリン協奏曲第1
番」を堂々としたボーイングに
より幻想的な世界に誘ってくれ
た金川真弓が、再び熱演を披露
してくれることだろう。



金川真弓

©Victor Marin

下野竜也



©Naoya Yamaguchi

Titani シリーズ
定期演奏会 第18回
8月1日(木) 19:00
指揮 下野竜也

■早坂文雄

二つの讃歌への前奏曲

札幌で伊福部昭や三浦淳史と
共に音楽活動をしていた早坂
が、1936年の「日本放送日本
的祭典曲懸賞募集」に応募し、こ
の曲は第2位に入選した。これ
が彼の中央楽壇デビュー作品と
なった。彼は日本音楽の素材を
雅楽や土着の民謡ではなく、
巷にあった小唄や端唄のような
「俗謡」に求めた。この曲は、2
曲からなり形式は極めて解りに

くいが、それぞれ序奏とコーダ
の間に三部の異なった楽想を挟
む構成となっている。

■スメタナ

連作交響詩「わが祖国」

スメタナは「チェコのグリン
カ」とも言われ、当時ボヘミアと

呼ばれていたチェコの国民音楽
を向上発展させた「チェコ音楽
の父」でもある。この曲は、プラ
ハ市に捧げられていることでも
わかるように、作曲者の熱烈な
祖国愛が最も反映された作品で
ある。当初、前半3曲を3部作と
して完成させるつもりだったが
しいが、作曲を進めていくうち
に、彼の祖国愛は益々高まって
いき、最終的には6曲からなる
連作交響詩として完成した。

第1曲「ヴィシエブラド」は、
モルダウ河のほとりにあるプラ
ハの古城で、そこにまつわる歴
史と栄光とが描かれている。も
っとも人気の高い第2曲「モル
ダウ」はチェコ語では「ブルタヴ
ア」と呼ばれ、川の流れにつれて
展開する景色と人々の生活を音
楽で表現している。「シャルカ」
はプラハの北東にある谷の名前
で、この谷と同名の女王の物語
が描かれる。第4曲「ボヘミアの
牧場と森から」は祖国の美しい
風土を情感豊かに描き出し、第
5曲「ターボル」は、次の第6曲

「ブルーニク」と共に宗教戦争
時代のフス教徒たちの英雄的な
戦いを讃えている。札幌・エリシ
ユカによる名盤があるが、4月
から首席客演指揮者となった下
野竜也が、どんなボヘミアの風
をおくってくれるだろうか。

(写真協力 札幌交響楽団)

◎前号「演奏会を楽しく聴くために」の
一部に誤りがありました。

和泉宏隆(モミヤシロ編)「宝島」の
説明の中に和泉宏隆氏について「現
在ピアノリストとして活躍している」
との記述がありますが、同氏は20
21年4月にお亡くなりになってい
ます。

ここにお詫びして訂正いたします。

茶話会へのお誘い

札幌くらぶでは昨年の4月か
ら、札幌定期演奏会(日曜日)終
演後に茶話会「札幌くらぶカフ
エ」を開いています。キララのレ
ストランを会場にして毎回10
名前後の方が参加しています。
ここ数回は札幌の楽員さんも顔
を出してくれました。

演奏会の余韻にひたりなが
ら、音楽談義はもちろん四方山
話に花を咲かせるのはいかがで
しょうか。

特に予約の必要はありません
ので、当日気が向いたらフアラ
と顔を出してみてください。「札
響くらぶデスク」担当のスタッ
フに声をかけていただければ、
ご案内いたします。
皆さんのご参加をお待ちして
います。



4月21日定期演奏会終了後

よこやまけい
チェロ奏者 横山桂さんに聞く札響を好きでいてくれる皆さんに
常にいい音を届けたい

気付いたらヴァイオリンを

出身は東京練馬区の上石神井、石神井公園の近くです。幼稚園から大学までずっとそこで過ごしました。都内ですが練馬区には畑がたくさんあって、今も自然が結構残っています。子どもの頃はいつも外で鬼ごっこやかくれんぼ、缶蹴りなどをしていました。

父はN響のセカンドヴァイオリン奏者（今も現役）、母は東京音楽大学でフルート専攻でした。僕が、ヴァイオリンを始めたのは2、3歳の時でしょうか。気づいたらもうやらされていたという感じです。国立音大のヴィオラ専攻だった祖父が、上石神井でヴァイオリン教室を開いていて、週1回そこに通いました。祖父は長野県白樺湖の近くに



白樺湖近くの別荘で父のレッスンを受ける小学校2年生の頃

英才教育が嫌になり

小学校5、6年生の頃、ヴァイオリンをやりに過ぎてこれをやめられるのなら何でもいいと思うようになりました。ヴァイオリンが嫌いになったというよりは、父や祖父から英才教育を受けていることが嫌になったのだと思います。そのとき、母に「チエロはどう？」と勧められ、小学6年生の終わりころから中学3年生まで父の紹介で三森未来子先生にチエロを習いました。チエロになると、父や祖父から離れられるようになり、それで、音楽を続けることができたと思います。今では2人と良好な関係です（笑）。

東京音大の附属高校に入学してから堀了介先生に師事しました。札響の石川祐支さん、猿渡輔さんは兄弟子ということになります。石川さんは10年くらい

先輩なので、堀先生の合宿には講師としてきてくれていた、兄貴分です。

朝も昼も夜も夢中になって

中学校では周りに音楽をやっている人がいなかったのですが、高校は楽器を弾く人たちがばかり。みんな自分よりも上手なような気がして、夢中になって練習しました。人生の中で一番がんばった時期かもしれないです。朝は6時半に学校に着いて練習し、給食の時間には抜け出して大学の練習室に行つてさら

それが刺激になって夜の10時とか11時までずっと練習しました。コンクールはほとんど受けていないんです。一次予選の楽屋でみんなが同じ曲を弾いているのが怖くて、楽屋から逃げ出しました…。不戦敗。

高校、大学の時は「絶対プロオケに入る！」なんて思ったこともなく、ただただ一生懸命練習していたのですが、大学4年生になるとプロになることを少し意識し始めました。N響アカデミーに入ることができ、卒業後も2年間は在籍。そこでオーケストラのノウハウを叩き込まれるうちに、オケに入れたらいいなあと思うようになりました。



プロフィール

東京都出身。12才よりチェロを始める。これまでにチェロを三森未来子、堀了介の両氏に師事。東京音楽大学附属高等学校在学中、練馬区新人演奏会オーディションで金賞受賞し、東京ニューシティ管弦楽団（現パシフィックフィルハーモニア東京）とサン＝サーンスのチェロ協奏曲を共演。同大学に特待生として4年間在籍し、大学創立100周年記念演奏会、ロイヤルアカデミー及びギルドホール音楽院との交歓演奏会等に出演。第79回読売新人演奏会出演。NHK交響楽団アカデミーを経て、日本フィルハーモニー交響楽団チェロ奏者を務める。東京チェロアンサンブル、Ensemble TREEDEN、アスチルベ弦楽四重奏団の各メンバー。試用期間を終え、2023年12月1日付で札幌交響楽団に入団。



チェロを始めてからは父と家で合奏することも

9年待ったオーディション

その後、エキストラ奏者としてもN響、読響、東響、都響、東京フィルなどいろんなオーケストラで演奏しました。札幌にも兄弟子の猿渡さんに声をかけていただいてエキストラに来たことがあります。読響にエキストラで呼んでいただいた時、同じくエキストラで来ていた小野木遼君と1日ですぐに仲良くなり、そのまま飲みに行きました。その1、2年後、小野木君は札幌に入り、僕も日フィルに入りました。年に1、2回くらいは札幌にエキストラとして呼んでいただくようになり、「札幌っていいところだなあ。もちろん上手だし雰囲気もいいし、しかも札幌には飲むところがいっぱいあるから札幌の街が好きだなあ」とずっと思っていました。でも札幌では、小野木君が入ってから



18歳くらいの頃

は9年間チェロのオーディションがなかったのです。「オーディション、いつあるの?」っていつも聞いて、「来年そろそろあるかもしれない」と言われた時はうれしくて、「わかった!めっちゃやらう(練習する)!!」と、ようやく夢が叶ったんです。

やるからにはいいものを

札幌では毎日楽しくやっています。みんな上手で、みんな優しい。エキストラで来た時から、チエロセクションは真面目だけれど怖すぎず、優しく迎え入れてくれました。

東京では忙し過ぎて丁寧に練習する時間もなくなつて仕事になってしまいがちで、「ここにはたらき分弾けなくなる。」と感じることもありました。札幌に来てからのこの1年間は練習の日々でした。1日中、できる日には5、6時間さらつたりしていました。

飲みのが好きだから、飲むときはもちろん飲むけれど、やっぱり練習。時間が増えたのでさぼれる環境ではありません。さぼっているとすぐ下手になつてしまふ。

い」って言ってビールを飲んで、それから家に帰るのです。マスターのおかげで、いいサイクルができています。

札幌はスギ花粉がないし人と仲良くなれる!

札幌に来て一番いいことはスギ花粉がないことです。つい最近(3月末)、1週間くらい東京にいたんですが、目はずっとかゆいし、鼻水もひどくて、くしゃみばかりしていました。それがこつちに着いた瞬間に止まるんです。幸せです。

そして、東京と札幌と比べて感じるの、なんといっても人との距離が近いこと。東京では道を歩いていても会釈もしないでスツと通り過ぎてしまふし、プライベートと仕事を分けたがありません。札幌は人との距離が近いから自分も溶け込みやすく話しやすい。人口が密集している東京ほど淡白じゃないので、近くに住んでいる人たちとも仲良くなれます。

たとえば、行きつけのバーのマスターと仲良くなったことから、昼間、営業していない時間に店を練習に使わせてもらったりしています。夕方マスターが店に出てくると「ビールちょうだい」って言ってビールを飲んで、それから家に帰るのです。マスターのおかげで、いいサイクルができています。



ジャズバーにて 小野木君(右)と一緒に

くなります。

循環していく札幌

今後、機会があったらパッサの無伴奏チェロ組曲とか弾いていきたいと思っています。先日もジャズバーで、小野木君と二人で同じパッサの無伴奏チェロ組曲第1番を交互に弾くというステージを行いました。「弾く人が違ふと同じ曲でもこれだけ違うんですよ」と小野木君がお客さんに話したりして、他にデュオの曲も演奏したり、面白い企画でした。こういう演奏の機会をもっと増やしたいですね。

札幌くらぶと札幌の会員の皆さまにお伝えしたいことはいっぱいあります。札幌を好きでいてくださることが嬉しいので、皆様には常にいい音を届けたいと思っています。オーケストラは卒業される人がいて、また新しい人も入ってくる。時間とともにメンバーは循環していき、音もちょっとずつ変わっていくものです。そういう札幌をずっと楽しんでいただけたらいいなと思います。とても雰囲気良くて、人間味が溢れている人たちが多い札幌です。これからもそんな札幌を愛していただけたら嬉しいですよ。

自宅でも練習、ミニチュト(弱音器)を付けてさらっています。この1年間は単身赴任でしたが、この春に家族も引越して来たのでいまは子どもの前でも練習しています。「こういう仕事をしているんだよ」ということを子どもも知っていた方がいいかなと。でも子どもにも教える気はないですね。僕が子どもだった時、親に習うのが嫌だったこともあり、押し付けたくありません。「やりたいうって10回くらい言ったらやらせてあげようかなとは思いますが、今のところ2回くらいしか言っていないので、いいや、と放つてあります。

バーメルトとペレーニ

好きといえば、指揮者だとバーメルトが好きです。指揮の様子、雰囲気や人柄とかを見ていて、この人についていきたいなと思わせてくれます。この1年で印象に残っている演奏会といえば「サロメ」。僕が札幌に来て最初の作品でした。実は、日フィルに入った時も最初の公演がワ

グナーのつかいオペラだったので、「どうして試用期間の始まった時にオペラの大変な曲ばかりなんだろう」と思ったものです。「サロメ」は一生懸命練習したこともあり、大変だったけれどとても記憶に残っています。なにしろ面白かった。チェリストではミクロシユ・ペレーニが好きです。Zyrtarに毎年来ていますね。ユーチューブに上がっている動画にN響演奏会でペレーニがアンコールにソロを弾いているのがあって、パッサの無伴奏チェロ組曲6番のサラバンドなんです。この演奏が好きでよく見えています。NHKのカメラワークもいいのかもしれないが、ちょっと神様を感じるような、何か一線を超えているすばらしい演奏なのです。ふとした時に聴きた

本当に寂しいのですが…

札幌からごの皆さま、お世話になっております。皆様ご存じのとおり、わたくし鶴田麻記は2024年3月をもって札幌交響楽団を退団させていただきました。

退団理由については各SNSなどでご報告のとおり、かねてよりお付き合いをさせていただいていた方との結婚のため、4月から活動拠点を東京に移す決断をしたからです。

札幌を退職することについてはずっと悩んでいました。大学を卒業してから6年間、本当に良くしていただきました。団員の皆様、事務局の皆様、そしてお客様、札幌からごの皆さまに支えられたので何も経験のない私でもやって来れました。本当に寂



札幌トランペットセクションの皆さんと

しいですが、これからの私の人生と一緒に希望を持って見守っていただければ嬉しいと思っております。

今回は札幌との思い出などを綴らせていただこうと思いましたが、札幌に入ってみて、受けた印象はまず団員が皆さん本当に優しく温かいオーケストラだと思いました。

私は学生時代、初めてオーケストラに乗った時プロに囲まれて仕事をすることの重圧感でオーケストラが怖かったです。

当時の先生に厳しく言われていたのもありますが、演奏に関しても振る舞いに関してもとても緊張していました。

しかし師匠の松田次史先生に言われた『オーケストラは家族

だ』という言葉のとおり、札幌はアットホームで、そしてお客様にも愛されているのを感じ、徐々に私の凝り固まった『オーケストラは厳しくて怖い現場』という概念が解けていったのを感じました(解けすぎていない心配なほど自由にやらせていただきました)。

仲間との思い出は数えきれないほどあります。

熱い本番の記憶、はじめてだらけのレパートリーに苦労したこと、旅先での思い出が強いかなと思いますが、道内だけではないと思います。

バーメルト札幌の集大成に喝采

東京公演2024 サントリーホール 1月31日

定期演奏会の感動が冷めやらぬ、バーメルトさんが任期中最後となる東京公演に追っかけをした。

満席のサントリーホールは熱気に溢れていた。テノールのイアン・ボストリッチ氏がお目当てと思われる女性客も多く、オペラグラスを手に待ち構えていた。

前半のブリテンのセレナードは、イアン・ボストリッチ氏の美声とアレッシオ・アレグリーニ氏の超絶的なホルンが、会場を優しく包み込み、その響きに陶

くたくさんの地へ演奏してまいりました。

たくさん演奏して、食べて、飲んで、笑い転げて、本当に楽しい思い出が溢れてきます。

そしてオーケストラの経験がほとんどない私に色々なことを教えてくださったセクションの皆様には感謝しきれません。

先輩の音色を追いかけ、真似して、本番を重ねて、ときに失敗してアドバイスを受け、見守っていただき、成長させていただいたと思います。

これから私は東京でいろいろなことに挑戦していきたいと思っています。オーケストラのみならず、様々な音楽に携わっていきたいです。札幌での経験を活かして、活躍が東京から札幌のみならず、届くように頑張りたいです。

どうぞ今後ともよろしくお願ひします。

元札幌トランペット副首席奏者
鶴田麻記

(この原稿は鶴田さんが団中の三月に書かれたものです)



(写真協力 札幌交響楽団)
©堀田力丸

なことに挑戦していきたいと思っています。オーケストラのみならず、様々な音楽に携わっていきたいです。札幌での経験を活かして、活躍が東京から札幌のみならず、届くように頑張りたいです。

どうぞ今後ともよろしくお願ひします。

予想を超えた喝采に、私もキタラで聴いたのとは違う格別な感動を受けた。そして札幌の認知度の高さと、毎年楽しみにされている札幌ファンがいることを知った。

東京公演はホクレンの協賛によって毎年継続されているが、帰りにはいつもお土産が配られる。それが楽しみの一つとなっている。今年は「片栗粉」と「大豆ミート」をいただいた。また、プログラムの広告に牧場の牛の写真がカラーで飾り、キャッチコピーの「日本には、北海道がある。」は、道民として誇りに感じ

た。

最後に、バーメルトさんと我々が札幌の集大成を「北海道には、札幌がある。」で讃えたい。

ありがとう

マティアス・バーメルト

会員／高木誠一

僕の愛聴盤⑨

ギターによる古典のぬくもり
イングリッシュ・ホルンによる

情景描写の妙

○24の練習曲(ソル)

ナルシノ・イエペスギター

(63年録音)



者として一世を風靡したイエペスは、実に格調高い境地をフェルナンド・ソルの練習曲で披露してくれた。丸みを帯びた音色と、清楚きわまる古典的造形美が聴く者をくつろぎの園へと誘いながら、正に家庭団らんぬくもりである。

ギターの奏法を身につけようとする者にとって、おそらく基本的な教則本と位置づけられる

24の練習曲。ベートーヴェンと

ほぼ同じ時代を生きたが故の洗練された古典様式が、シヨパン

の練習曲同様、芸術性の高さを誇っているのだが、変化に富み

ながらの24曲それぞれの表情を弾き分けているイエペスの音楽性を賞賛したい。

古典としての風格を漂わせ

た、ギター音楽の神髄を示す1枚である。

○交響詩「4つの伝説曲」から

「トゥオネラの白鳥」作品22

(シベリウス)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮

ベルリン・フィルハーモニー

管弦楽団

(64年録音)

「新世界」交響曲といえれば第2楽章、なつかしく、ほのぼのとした牧歌的抒情をホールいっぱいひろげるイングリッシュ・ホルンの響きに心がなごむ。この

楽器、古くは「ワイリアムテル」

序曲(ロッシニ)や「幻想交響曲(ベルリオーズ)の第3楽章な

ども存在を主張していたが、

近・現代においては、料理の味を引き締めるスパイスの役割を

持たされて、特にマーラーやR・シュトラウスの大編成の管弦楽曲

作品でなくてはならない重要な位置を占めるようになった。

加えて、ヴェルディが「柳の歌(歌劇「オテロ」)で人間心理

の機微と深層を説得力豊かに表出できたのもこの楽器を有効に

用いたからこそであろう。重要な局面での、色気を含んだ神秘



的響きが深遠な魅力を湛えているのだ。

シベリウスが「トゥオネラの白鳥」で独自の世界を開拓した

のも、僕たちに今一度この木管

楽器への関心を呼びよせることになった。全体的にほの暗く幻想的な曲想ながら、イングリッシュ・ホルンに託した情景描写がすばらしい。

コーリン・デイヴィス指揮ノ

ボストン交響楽団を筆頭に名演

に事欠かないものの、こうした

作品においては、カラヤンが高

度な適性を示す。全体を見通す

デッサン力のみならず、多くの

パートに分けられた弦楽器群の

はさまを漂浪する、凍えるよう

な表情の描写に聴く者は息をの

む。

極寒の気を震わせ、はるか

頭上を染めるオーロラに放射さ

れるイングリッシュ・ホルンの

音色。僕にとっては、当ディスク

こそがこの楽器の地位を不動のものにしたと思えてならないのだ。

バーメルトのブルックナー6番

会員／村岡範男

ブルックナーの第6交響曲

(以下ブル6)は、彼の交響曲の

中で微妙な位置にある。4番以

降の6曲で人気投票をすると、

大差で最下位である(多田調

べ)。5番8番に比べると雄大さ

や男性的逞しさという点で劣る

し、4番7番ほど流麗な美しさに溢れているわけでもないから、どちらの枠にも入らない(9

番は別格)。しかし両端楽章は壮麗な響きに満ちているし、3楽

章のスケルツォは味わい深い。何より2楽章が魅力的で、これは彼の緩徐楽章の中で最も美しいの一つであろう。ブル6は隠れた名曲なのである。

を絞る。

冒頭、高音弦の刻みに上に低

弦が第一主題を奏するところから、その奥深い音にゾクゾク

した。曲を通してテンポは遅めで、

ブルックナーの一番の楽しみはフルオーケストラの豊かな響きを味わうことだから、ゆったり

の方が好ましい。4楽章ではリタルダンドするなど思い入れた

っぷりで、指揮者の気合が感じられた。

ブルックナーで色彩を感じることはまれだが、2楽章の冒頭

弦楽の和音移ろう中、オーボエが舞い降りる箇所には色を感じる。バーメルトは丁寧に音を重ねていくことで、純度の高い美

の演出に成功した。彼はジョー

ジ・セルの弟子だから、緻密さと自然な音楽の流れを両立させるのは得意だが、その清冽な音楽づくりの魅力は、ここでも存分に味わえた。

3、4楽章はスケールの大きな

演奏で、札幌も絶好調。特にホルンと低弦の分厚い響きに酔い

れた。終楽章コーダでは、最後に

1楽章の第一主題をトロンボーンが高らかに奏でて終わるのだが、そのテーマが聞こえなかったのは残念だった。しかし全曲を通して、金管群の清澄なハーモニー

が、ブルックナー特有のオルガンの響きの根幹をがっちり支えていたのは間違いない。

各楽章後の残響の美しさを味わえたのも嬉しかった。札幌の聴衆にはかつて「即ブラボー屋」がいて何度も興奮したものだ、最後の音が終わり、指揮者が腕を下すまでの数秒間、キタラの豊かな残響を味わうことができるようになった！聴衆が成熟した証として喜びたい。

バーメルトは札幌の力をフル活用してブルックナーの魅力を味わわせてくれた。首席の任からは外れるが、今後も札幌でブルックナーを振ってもらいたい。

次は4番をぜひ！

会員／多田真一

「30周年記念誌」への 資料提供のお願い

「札幌くらぶ」は、2026(令和8)年8月に創立30周年を迎えます。

現在、「30周年記念誌」発行に向けて、準備会のスタッフで資料収集と原稿執筆を進めているところです。編纂にあたっては、過去の作成物や写真などの資料があまり残されていないことが最大の障害になっています。会員の皆様には、お手元に次の資料がありましたら、データ提供または現物をお借りすることはできないでしょうか。

ご協力をよろしくお願いいたします。

◎「札幌くらぶ」コンサート

第1回から第9回までの

チラシ・プログラム・写真

◎交流会・練習見学会の写真

(年月日、場所も含めて)

連絡先

30周年記念誌発行準備会

代表 武藤義典

メール:muto@sakkyoclub.net

お元気でご活躍ください



トランベツト副首席奏者

鶴田麻記さん

お世話になりました。皆さんに支えられて、6年間やってきました。ありがとうございます。これからも頑張りますので、よろしく願います。

2024年3月31日退団

長い間ありがとうございました



パーソネル・マネージャー

高井 明さん

札幌くらぶさんと言えば、上田文雄さんが「札幌を応援するぞ」と言われて、皆さんを集められて発足した当時の頃を思い出します。それからずっと長い間、いつも札幌を見守っていただき、本当に嬉しく思います。これからも札幌の応援につながる活動をされますようお願いしております。

2024年3月31日退職

運営スタッフ活動報告

下半期(10月~3月)

スタッフの声

▼年のせいか最近夜のコンサートに行くのが億劫になってくる。行きたいコンサートがある、まず時刻を確認し、午後開演なら迷わずチケットを購入するが、夜だとしてばし逡巡し、あきらめてしまうことが多くなった。終演後の9時からスキニに繰り出した頃が懐かしい。だから札幌の定期はもちろん日曜日。終わってもまだ3時。キタラレストランでゆっくりお喋りを楽しんでも、まだ外が明るいのが嬉しい。(み)

▼右手の小指の根元にポツンと筍のような骨ができ、痛くもかゆくもなかったものでほっておいたが、気になったので医者に相談した。今は注射で骨を溶かす薬がある、と紹介された医院へ行って見たが、コロナの影響で今は輸入されていないという。様子を見て指の伸び角度が深くなったら手術をすることになり、今年1月に手術をした。手術日を考えず女房には除雪で迷惑をかけてしまい、春に手術をすればと後悔している。(佐々木)

○10月8日(日)

定演終了後

茶話会「札幌くらぶカフェ」

11名参加

○10月16日(月)

運営会議 10名出席

○11月12日(日)

花束贈呈

ヴィオラ奏者

水戸英典さん

定演終了後

茶話会「札幌くらぶカフェ」

8名参加

○11月20日(月)

運営会議 13名出席

○11月27日(月)

会報103号発送

○12月18日(月)

運営会議 16名出席

○1月15日(月)

運営会議 12名出席

○1月21日(日)

第38回札幌くらぶサロン

豊平館 46名参加

第1部

ニユーイヤサロンコンサート

コソトバス 下川 朗さん

ピアノ 仲鉢莉奈さん

第2部

ニユーイヤ交流パーティー

○1月27日(土)

札幌市内中学生招待活動

手稲中学校 22名

○1月28日(日)

定演終了後

茶話会「札幌くらぶカフェ」

11名参加

○2月19日(月)

運営会議 12名出席

○2月25日(日)

札幌市内中学生招待活動

南ヶ丘中学校 24名

定演終了後

茶話会「札幌くらぶカフェ」

12名参加

○2月26日(月)

会報104号発送

○3月16日(土)

花束贈呈

トランベツト副首席奏者

鶴田麻記さん

パーソネル・マネージャー

高井 明さん

○3月18日(月)

運営会議 17名出席

○3月1日~3月31日

能登半島地震復興支援金募集

(オーケストラファンサンプル

金沢への支援金)

募金総額

150,000円を送金